

選者 川口孤舟

参加者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵

佐藤ただしげ 豊田ゆたか 西澤國護 長谷見びん 星田啓子

投句・選句

今井紀久男 熊谷くにお 小早健介 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 中川雅夫

福島正明 古川百合子 古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子

山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ

伊賀山そらお 梅崎くすお 重枝孝岳 庄司龍平 朱牟田恵洲 高橋清子

橋口隆 早川允章 山本三恵

【互選句】○は会員選者の「天」 ◎は孤舟選者の選

十二点 しゃがみ込み子猫を囲むランドセル 康敏 (紀・忠・と・孝・恵・清・堂・允・百・規・け・天)

十一點 ◎陽炎や更地となりし生家跡 昇 (紀・孤・く・と・恵・康・己・び・允・百・亜)

十点 酒断ちて長屋の花見となりけり 紀久男 (そ・くす・○健・た・ゆ・龍・己・啓・亜・盛)

九点 雑踏に生きて卒寿や名草の芽 盛雄 (○くす・○紀・健・龍・康・ゆ・允・百・三)

八点 ふるさとの桜に逢ひに旅支度 忠彦 (紀・千・孝・た・清・國・昇・天)

長閑さや難儀して切る足の爪

盛雄

(そ・くす・紀・允・恵・正・啓・規)

七点 卒業す愚息の愚の字とれぬまま 孤舟 (くす・紀・忠・健・恵・堂・百)

帰らざる河に委ねし花筏

健介

(紀・忠・五・と・雅・び・允)

縄文のヴィーナスふくよか春うらら

啓子

(そ・規・○千・恵・康・隆・け)

春光や心地よき椅子我が居場所

天牛

(紀・千・龍・ゆ・雅・國・正)

六点 ◎昭和の日今日のお昼はボンカレー

とみ子

(紀・孤・く・○己・○正・啓・亜)

◎黒板に教師の氏名朝桜

康敏

(忠・孤・く・清・隆・天)

春の雲ママごめんねと夫逝けり

けい子

(紀・忠・五・堂・正・啓)

五点 ◎鳥雲に托鉢僧の美髯かな

くにお

(紀・孤・堂・啓・け)

◎花びらを耳に留めて羅漢さん

とみ子

(紀・五・孤・隆・び)

箱車園児を乗せて花の中

びん

(そ・紀・康・正・○規)

四点 愛犬の墓にタンポポがまた咲きぬ

忠彦

(紀・千・國・天)

八朔を剥く拇指を怒らせて

孤舟

(孝・堂・○昇・け)

銀輪のスポーク光る東風の土手
 救はれし医師の一声藤の花
 ◎世の憂さを知るや知らずや山桜
 ◎初デートのフレアスカート風光る
 虫干しや五七の桐の古羽織
 西行を気取り華やぐ花の旅
 庭蘇芳（にわすおう） 古人（いにしえびと）の春袴 啓子（紀・〇と・孝・三）
 亡き妻の風そよそよと花は葉に 規雄（紀・く・昇・三）

三点

膝を突き目線合わせる両陛下

（春の能登見舞い）

紀久男（忠・と・隆）

藤房のむらさき濃くし水に影
 目黒川人と花とに埋れて
 桜蕊ふる宴の果つるがごと
 ◎ありえない夢見続けて大朝寝
 ムーミンの飛び出す絵本蝶の昼
 老いて坂いささか危うし花並木
 裏山と歌うや庭の若葉達
 花見上げこれが最後か酒含む
 遅かりし九段の森の花便り
 綻びしがザの約定鳥雲に
 児童らのはしやぐ声する春時雨
 ◎鶯のレジエンドらしき節まわし
 混沌の世に飛ぶ黄砂おぼろ月
 友とせし植物凶鑑風光る

くにお（紀・五・た）
 とみ子（紀・國・び）
 千恵（紀・と・〇三）
 全（孤・〇五・〇盛）
 康敏（紀・五・け）
 ゆたか（紀・龍・國）
 雅夫（紀・龍・己）
 國護（紀・己・雅）
 びん（千・け・盛）
 全（紀・啓・允）
 百合子（紀・た・雅）
 全（くす・紀・孤）
 啓子（己・正・規）
 全（紀・千・天）

二点

アメリカで通訳の詐欺四月馬鹿
 落城のごと崩れゆく蜃気楼
 壺焼の潮煮零れ波の音
 春の航異国の人に囲まれて
 牡丹に小さき傘さす古き苑
 人恋し窓辺の猫に春夕焼
 雨に会いやがて川面に花筏
 庭に咲く菜の花鳥が啄ばめり
 謝恩会スマホに残る淡き恋
 若竹や長所を伸ばした方が良い
 亡き妻の風吹き渡り野に山に
 儂さを纏ひて花の十重二十重
 どうだんやまろき姿に小さき花

忠彦（紀・昇）
 孤舟（規・盛）
 全（清・亜）
 五郎太（紀・康）
 全（紀・び）
 とみ子（た・百）
 ただしげ（國・亜）
 ゆたか（紀・雅）
 國護（康・堂）
 正明（紀・健）
 規雄（そ・健）
 啓子（紀・昇）
 亜也（紀・雅）

一点

到来の棒鱈昼餉に舌鼓

紀久男（く）
 忠彦（孤）

◎昭和の日何の祝日知らぬ子等

朝に窓開けて囀り聞く楽し
 一条の護摩焚く煙春の山
 つちふるや広島京都横浜も
 柔き鱭のたたき酒もよし
 遠くからロバのパン屋の臚かな
 たんぽぽや手折りたくなるその黄色
 玉孝や久に揃ひて春歌舞伎
 備讃瀬戸波静かなり春の海
 雨上がり満天星の花白い鈴
 清明の細かい雨や未だ遠し
 文旦の香り懐かし春來たる
 走る距離いつもと同じ春暑し
 ◎磯の香やほのかに香る若布汁
 若緑鳥二羽とまりゆれる枝
 卒業す振袖袴今高女
 壺焼きの潮香に登る島の茶屋
 能登の災浄め行くかに春一番
 オータニサンホームラン五本四月馬鹿
 忠彦 (孝)
 五郎太 (百)
 全 (紀)
 全 (垂)
 全 (紀)
 とみ子 (紀)
 千恵 (紀)
 全 (紀)
 全 (三)
 全 (紀)
 全 (ゆ)
 正己 (紀)
 ゆたか (孤)
 雅夫 (紀)
 國護 (健)
 びん (ゆ)
 盛雄 (紀)
 天牛 (紀)

(四月一日の段階で・・・一日に)



【句 評】

十二点句 しゃがみ込み子猫を囲むランドセル 康敏

とみ子さん・仔猫の鳴き声や 児童たちの声が聞こえてきそうです。
 恵洲さん・・・一年坊主か。大きすぎるランドセルが微笑ましい
 堂哉さん・・・季語が利いていますね。子供達の笑顔や声が浮かんできました
 百合子さん・・・子供が子猫を可愛がる様子がまた可愛い。
 天牛さん・・・ピカピカの一年生でしょうね。身体より大きいランドセルが並んでいます。

十一句 陽炎や更地となりし生家跡 昇

孤舟選者・・・家を取り壊された跡地が陽炎の中で揺らいでいる。
 恵洲さん・・・長閑な春景色の中の寂しさ。
 康敏さん・・・陽炎が立ちのぼるくらいだから広い土地だ。新居を建てるのか、或いは
 アパートを、または売却してしまうのか。
 百合子さん・・・陽炎ですべてを言い表していますね。
 亜也さん・・・日本中で増加中。されどそれぞれの深き感慨。

十点句 酒断ちて長屋の花見となりけり 紀久男

ただしげさん・酒を断つての己が花見を落語「長屋の花見」に見立てての発想が面白い。
 健介さん・・・落語の中の世界が現実味を帯びてきたのでしょうか、他人事ではありませ
 ん。

龍平さん・・・往年「舞踏会の手帖」なるデュヴィヴィエの映画があった。昔の彼女が貴殿の今を思いだしていますよ！ エッ 今井さん？
ゆたかさん・・・いささかもさびしい様子がうかがえます。
亜也さん・・・ユーモアに富んだ自嘲。されど謹んで同情申し上げます。
盛雄さん・・・どのような会話があったのでしょうか。愉しい佳句。

九点句

雑踏に生きて卒寿や名草の芽

盛雄

康敏さん・・・卒寿の身と名草の芽の取り合わせ。九十歳を超しても、これからの気力が漲っている。

ゆたかさん・・・卒寿おめでとうございます。

百合子さん・・・穏やかで深い心境！

八点句

ふるさとの桜に逢ひに旅支度

忠彦

ただしげさん・桜の季節に故郷に帰るわくわく感が感じられる。

天牛さん・・・よっぽど立派な桜なんでしょうね。旅支度がいいですね。

長閑さや難儀して切る足の爪

盛雄

恵洲さん・・・よくわかります。

允章さん・・・年寄りの実感をユーモアを込めて美事に表現している。

七点句

卒業す愚息の愚の字とれぬまま

孤舟

恵洲さん・・・本当は結構自慢の倅？

堂哉さん・・・面白い！ご自身？息子さん？

百合子さん・・・謙遜しつつもご息子の成長に対する情愛を感じました。

縄文のヴィーナスふくよか春うらら

啓子

千恵さん・・・以前縄文展を見に行った時にそのふつくらとした可愛らしい姿に縄文人の表現力の豊かさに驚きました。春うららです。

恵洲さん・・・縄文人にとっては、美人だったのでしょうか。

康敏さん・・・八ヶ岳山麓で発掘された妊婦の土偶は、大きなお尻で全体がふくよかだ。

季語が効いている。

隆さん・・・埴輪の造形に想像が尽きない。

春光や心地よき椅子我が居場所

天牛

千恵さん・・・戸建てのお家の廊下に置かれた籐椅子にいつも座って春陽を浴びて穏やかな時間を過ごす。正に春うららですね。

龍平さん・・・私もこの春息子にニトリの椅子をプレゼントされた。目の前で8分組み立ててくれたモダンな品。まあヨカ気分です。

ゆたかさん・・・椅子に座って 花を愛で 鳥の声に耳を傾けておられるのでしょうか

六点句

昭和の今日のお昼はボンカレー

とみ子

孤舟選者・・・昭和は遠くなりけり。

正己さん・・・まず思わず微笑んでしまいました。昭和を象徴するレトルト食品ですよ。家で昼食となると残り物のごはんについついこうなりがちです。

正明さん・・・インスタント食品のはしりです。良くも悪くもインスタントな世相になってし

まいりました。

亜也さん・・・お忘れかもしれませんが、松山容子さんでした。

黒板に教師の氏名朝桜

康敏

孤舟選者・・・新一年生の初めての授業。

隆さん・・・東京都は教師の定員不足で新年度が始まった。昨今聖職には遠い仕事になった。全国の新人教師にエール。

天牛さん・・・多分我々の年代の方の句だと思えますが、よくもこんな情景をおぼえておられたんですね。感心しました。

春の雲ママごめんねと夫逝けり

けい子

五郎太さん・・・なかなか詠み難い状況ですが、簡潔な句に愛情と哀しみを感じます。

堂哉さん・・・併せて、ありがとうございますかね。

五点句

鳥雲に托鉢僧の美髯かな

くにお

孤舟選者・・・剃髪の僧もヒゲは自由。

堂哉さん・・・豊中では見ることはありませんが、京都に勤めていた頃は何度か見掛けました。朝早く列をなしてオーオーと声を発しながら行く後ろ姿を思い出しました。

花びらを耳に留めて羅漢さん

とみ子

孤舟選者・・・五百羅漢の中には確かに耳朶の大きな像も多い。

五郎太さん・・・五百羅漢でしょうか。落花の時期の優しい句。角川歳時記第五版では、

「花びら」は連句では季の詞だが、俳句では桜と特定できないとされていますが、隆さん・・・「止めて」の方が偶然を表している。車のトランクの溝に桜の花びらがあった。こういう花びらとの出会いもある。

箱車園児を乗せて花の中

びん

康敏さん・・・桜咲く公園に園児たちを乗せた箱車を保母さんが押してきた。可愛いらしい光景だ。残念なことに、上五と下五を入れ替えても句が成立する「観音開き」の句です。桜を主題にして「花吹雪園児乗せたる箱車」では。

規雄さん・・・桜並木の下を箱車に乗せられた園児等が、大はしやぎしながら進んでいく。そんな光景が見えるようです。

四点句

愛犬の墓にタンポポまた咲きぬ

忠彦

千恵さん・・・可愛がっていたワンちゃんのお墓に供花のごとく可憐なタンポポがあるので。タンポポ似合います。

八朔を剥く拇指を怒らせて

孤舟

天牛さん・・・何年も忘れられない可愛がっていた犬をタンポポも忘れないのでしよう。

堂哉さん・・・美味しい季節になりました。下五が面白いです。

銀輪のスポーク光る東風の土手

孤舟

ただしげさん・・・春の風を受けながら自転車土手を走る風景が清々しい

救はれし医師の一声藤の花

健介

孝岳さん・・・信頼を寄せている医師の一声は、大病を患っている身にとって何よりも救いになる。藤の花に癒されます。実感です。

隆さん・・・人は結局死ぬ定め。それでも医師の言葉で延命に救いを得る。

世の憂さを知るや知らずや山桜

堂哉

孤舟選者・・・山桜は人間界の俗事にお構いなく、季節がくれば健気に咲く。

天牛さん・・・世の中の喜びも、憂きこともすべて知っていて、じっと何十年生きているのですね。

初デートのフレアスカート風光る

堂哉

孤舟選者・・・風にスカートの裾を靡かせて。青春性が眩しい。

くにおさん・・・「風光る」を上五にして、下五に「初デート」にしたら三段切れになるでしょうか？

隆さん・・・なぜか女性は昔のことを鮮明に覚えている。古着の整理の光景かも。

紀久男・・・一句の中に二つの片仮名は避けると言われているものの捨てがたい。

虫干しや五七の桐の古羽織

正明

恵洲さん・・・五七の桐の紋は、世が世なれば高貴の家柄かな。

庭蘇芳（にわすおう） 古人（いにしえびと）の春袴

啓子

とみ子さん・・・いにしえのみやびやかな衣装や色あいを、言葉で見せていただきました。

三点

膝を突き目線合わせる両陛下

紀久男

（春の能登見舞い）

隆さん・・・元上司は上皇陛下の馬術部後輩。閉門後の「岡山後楽園」で「これが浩宮です」

と話されたとか。陛下を身近に思う。「能登の春陛下の膝は被災者と」でも。

藤房のむらさき濃くし水に影

くにお

五郎太さん・・・「濃くし」が効いています。日が急に射したのか、少し日がたち色が濃くなつたのか。

桜蕊ふる宴の果つるがごと

千恵

とみ子さん・・・満開の桜の時期から、日常へ戻るまでのあわいを、上手に読まれたと思います。

三恵さん・・・桜は、日本では、儂さの象徴。悲しい、寂しいとは異なる独特の無常感・

寂寥感を感じます。「荒城の月」の情景を思い出しました。

ありえない夢見続けて大朝寝

千恵

孤舟選者・・・こんな非現実的な夢ならいつまでも見ていたい。

五郎太さん・・・どんな夢なのでしょう？何かとぼけていて、大朝寝という季語もよく合います。

盛雄さん・・・夢には何種類かのロマンがあるものです。“ありえない夢”が面白い一句。

ムーミンの飛び出す絵本蝶の昼

康敏

五郎太さん・・・春ですね。楽しい句です。

裏山と歌うや庭の若葉達

雅夫

龍平さん・・・自然界の永遠の巧まざる所作。政治資金規正法のような短期ザル化とは無縁。

遅かりし九段の森の花便り

びん

千恵さん・・・近年の桜はほぼほぼ四月になる前に散っていたのがこの令和6年の桜の開花はほぼ4月近くでした。記憶に残りますね。

盛雄さん・・・意味深な、何が有ったのかでしょうか。

児童らのはしゃぐ声する春時雨

百合子

ただしげさん・急な雨で戸外で遊んでいた子供たちのはしゃぐ声、ほのぼのとしたものを感じる。

鶯のレジェンドらしき節まわし

百合子

孤舟選者・・・鶯にも「喉自慢」は居る。

紀久男・・・今回の次点とします。

混沌の世に飛ぶ黄砂おぼる月

啓子

※康敏さん・・・黄砂のために朧月になったのでしようが、季重なりでは。(句会にても同じ指摘あり)

友とせし植物凶鑑風光る

啓子

千恵さん・・・子供のころから花好きで探求心旺盛なお子さんだったのでですね。凶鑑携帯で野山を散策したのでしようか？

天牛さん・・・私は昆虫凶鑑を友として肌身離さず見ていたものですから、よつぼどの植物好きの方でしょう。

二点句

壺焼の潮煮零れ波の音

孤舟

亜也さん・・・「潮」のちよつと大袈裟な感じがいい。

春の航異国の人に囲まれて

五郎太

康敏さん・・・円安で外国からの観光客が増えている。国内空路でも周りの席が外国人に占められることは珍しくない。

人恋し窓辺の猫に春夕焼

とみ子

ただしげさん・春の夕焼のほのぼのとした風景が楽しい。

百合子さん・キャットタワーの天辺に座って長いこと外を見ていた猫を思い出しました。近寄りがない哀愁が漂っていました。

雨に会いやがて川面に花筏

ただしげ

亜也さん・・・一句の中で時間の経過を表す巧みさ。

謝恩会スマホに残る淡き恋

國護

康敏さん・・・謝恩会で久しぶりに初恋の人に会った。当時のLINEや映像はスマホに残してある。当句会では珍しく瑞々しい句。尚、「謝恩会」は、会員は美女ばかり(？)だったという黛まどか主宰の『ヘッピーバーン』では春の季語に採用されていたが、歳時記には載っていない。謝恩会が季語として認められるか疑問が残る。

堂哉さん・・・短編小説になりそうですね。

儂さを纏ひて花の十重二十重

啓子

紀久男・・・今回の句中の中で、自分として天地人で云えば「人」。佳句ですね。

一点句

一条の護摩焚く煙春の山

五郎太

百合子さん・・・場所はどこなのでしょう。分からないけれど情景が目には浮かびました。

柔き鱈のたたき酒もよし

五郎太

亜也さん・・・柔らかさが身上。酒もちよつと甘めがよろしくて…。

備讚瀬戸波静かなり春の海

ただしげ

ゆたかさん・・・春の海の、のたりのたりした情景が目には浮かびます

文旦の香り懐かし春來たる

ただしげ

ゆたかさん・私も懐かしい思い出があります。

※孤舟選者&康敏さん・・・文旦は秋の季語です。

磯の香やほのかに香る若布汁

ゆたか

孤舟選者・・・磯の香と若布汁の香が溶け合う。

壺焼きの潮香に登る島の茶屋

びん

ゆたかさん・・・潮の香りがただよってきます。



【次回青葉会予定】

※分かりにくいと感じる方は遠慮なく、メール・TEL080-8870-8201 星田までお問い合わせください！

◇令和五年五月二十三(木) 恒例となっている一年に一度の吟行を催行します。

参加者は全5句の出句をお願いしますが、まず当季雑詠2〜3句(御参加の旨を書添えて)星田までご提出をお願い致します。吟行にての作句分を加えて全5句としていただきます。

投句の方は、いつもと同じように、2句を目処として星田までお送りください。

※当季雑詠は先にPC入力をして句会時に配布致します。

吟行での作句分は句会場にて清記をして、2種類を同時にご覧いただき選句します。

◇投句、当日参加者の雑詠2〜3句、の締め切りは 五月二十日(月) 午前中

※句会開始前に、句会場にてお弁当(サンドイッチ)を用意する関係上、その数を確認するため、恐縮ながら締め切りを通常より一日早くさせて頂いていただきました。

句会場：午後一時から 東五反田

・・・吟行(左記要領をご覧ください)後となります。

※句会のみ参加希望者は句会場にて合流。出句は先に当季雑詠5句全部いただくもよし、吟行参加者と同じように当季雑詠2〜3句を先に提出いただき、残り2〜3句を吟行の如く、お越しになる途中に作句された句も勿論受け付けます。

【吟行催行要領】 五月二十三日(木) 10:00 JR山手線 目黒駅「東口改札」



参加者全員で揃って左記自然教育園に歩いて行きます!!

吟行の場所 港区白金台 自然教育園 (港区白金台五・二十一・五 電話：03-3441-7176)

※交通手段 JR山手線目黒駅東口、東急目黒線目黒駅より目黒通りを東へ徒歩約10分

東京メトロ南北線、都営地下鉄三田線白金台駅1番出口より目黒通りを西へ7分

吟行は目黒駅集合10時〜12時15分 自然教育園出口集合(入場時に指定)まで。

出口集合時間12時15分ごろから、タクシーに分乗して、左記句会場所へ移動。

句会場所 品川区東五反田2丁目10の1「パークタワーグランスカイ」2号「コミュニティプラザ」

孤舟選者が玄関鍵を持参。句会からご参加の方は正面玄関にて星田までお電話をください！すぐお迎えに上がります。(星田携帯：080-8870-8201)

🌸勝手ながら 昼食(サンドイッチ)を準備させていただきます(税込み980円です)

お弁当が不要な方は、星田宛ご出句の時に、お申出ください。



【青葉会報】

一、 大型連休中はみなさまご家族での時間を過ごされた方も多かろうかと存じます。その最中の寒さは吃驚致しましたが、お変わりなくお元気な毎日でしょうか。4月句会はほぼいつものメンバーがご出席、結果は十点越えがお二方、康敏さんと昇さん、それに長らく句会ご欠席の紀久男さん、卒寿の仲間入りをされたとその句で知った盛雄さん等が高得点でした。青葉会も今年90代になれる、或いはなられた方々が、尚お元気で研鑽を続けておられるお姿に頭がさがります。

二、 前回三月455回青葉会報掲載句「雉鳴くや瀉の静寂を切り裂けり」に於けるコメントに発し、作者の熊谷國男さんから「切り裂けり」の分析・ご自身もその師から、ここにある完了の助動詞「り」については、この助動詞は「くせ者」なので十分に注意するように、と事あるごとに説明を受けてきた特別の思いのある助動詞とのこと・・として、考察文を頂戴致しました。私どもの今後の作句の参考に供することが出来ると思われましたので、ご了解をいただき茲に全文掲載させていただきます。

1. 切れ字「けり」について

切れ字「けり」は過去・詠嘆・気付きの助動詞で活用語の「連用形」に接続する。それならば。「切り裂けり」の「けり」は「切り裂く」の連用形に接続しているのか。

「切り裂く」は他動詞でカ行四段活用。未然形く命令形までは活用語尾は「か・き・く・く・け・け」となる。「けり」に接続するには連用形の「切り裂き」でなければならぬ。しかし、句は「切り裂」に「けり」がつながっているが、「切り裂」では言葉になっていない。「けり」という助動詞はこの句には存在しない、ということになる。

2. 「切り裂けり」を文法的に分解すると、「切り裂け」と「り」となる。「切り裂け」は

「切り裂く」の已然形、「り」は完了の助動詞「り」の終止形で、サ変の未然形と四段の已然形に接続する。

活用語尾は未然形く命令形まで「ら・り・り・る・れ・れ」。(サ変・四段の命令形に接続するという説もある。)

※ 用言の活用形は未然形、連用形、終止形、連体形、已然形、命令形の6つ。

「輝けり」や「艶めけり」なども同じ完了の助動詞「り」の接続した言葉です。



併せて、コメントされた高橋康敏さんからも一文を頂戴し、理解を得ましたので茲に一部引用させていただきますました。

「三月会報六頁の熊谷國男さんの「雉鳴くや瀉の静寂切り裂けり」に対する拙評に誤りがありましたので、取下げ致します。尚、下五の「裂けり」は「裂く」の已然形「裂け」+完了存続の助動詞「り」で、過去回想の助動詞「けり」(切字)ではありません。私の不注意でした。」

三、孤舟選者 近詠

鯉干す浦曲の風を捌きつつ
ペンダント背中に廻し潮干狩
数珠子には蛙になるを未だ知らず

ペガサスにならんと仔馬広野駆く
雲雀野を風となるまで歩きけり

四、関係者近詠

事故現場に献花一束雪を呼ぶ
冬うららキッチンカーの間に屋台
女手に繕ふ垣根虎落笛
初釜へ畳紙に揃へ帯小物
這ひ這ひの一気に速さ冬日差し
さががきの大根いしるの貝焼へ
一行の風切る声や寒念仏
石垣に鍼の反り紅白梅
野崎村の廻り舞台や梅一枝
アネモネの花に安堵の目を落とす

	眞希子	近くなく遠くなく立つ初筑波	陽亮
	全	出初式大空濡れて滴れる	全
	全	老いて独り寒九の風呂を怖れけり	全
弘子	全	腰痛の鬼遣らへども遣らへども	全
	全	梅東風や未だに明けぬ心の喪	全
	全	さなきだに冷えし心に寒戻る	全
	全	針供養妻の遺影に斯く斯くと	全
	全		
	全		
	全		
	全		
	全		

「森の座 五月号より」選者 横澤放川（日経俳壇選者）

令和五年五月十一日

（了）